

サンプル

両者合意の上で乳首バイブをつけてデートするサラリーマン

彼から『駅に着いたぞ』というメッセージが入っていた。

そのあとに『お前のリクエストも大丈夫だからな』

少しして『つけてみたけど結構いい感じじゃね？』と。

スマートフォンを強く握って意味もなくスクショしてしまった。画像などは添付されてないけどワクワクもドキドキも止まらない。走るほどではないけれど、心なしかとても早歩きになっている。

「遅れてすみません」

「いいよ、言うほど待ってない」

待ち合わせに遅れてきた僕を許すこの最愛の人とは今日で付き合って1年と3日目になる。仕事終わりのデートならいつもの場所で落ち合い、僕の住むマンションに泊まる予定だが、付き合って一年目の特別な日なのですぐには帰らず途中の駅で立ち寄って、詳しくない街で外食をする。恋人同士のちょっとした秘密を胸に抱えて。

「カフェで待っててくれてもよかったんですよ」暖かくなってきたと言っても夜はまだコートがちょうどいい時期だ。

「すぐにご飯を食べるって言ってるのにわざわざ入らないよ」

正面で向き合えば平均よりも背が少し高い僕と同じくらいの目の高さ、顔も整っている僕の恋人はどこにいても輝いて見えるが、見知らぬ街のややくすんだ街並みの外壁でも、チェーン店のコンビニの派手なのぼりでも、店内から漏れる明かりも彼という存在を引き立てる舞台装置のようだ。

そして特別な日に僕のわがままを叶えてくれる人。

「引き継ぎにミスったら上司の経験談を聞くことになってしまっ」

「社会人2年目はそういうもんでしょ。それともなに、俺と仕事どっちが大切なのって言った方が良かった？」

「あなたです」

予約したお店に二人で並んで歩く。週末の金曜日、19時。駅からそれぞれの目的に向けてすれ違う人、同じ流れに沿って歩く人、混んではいないが周りのことを見ながら歩かないと迷惑になるような人の密度の中で彼が歩きながら僕に声をかける。

「そういうのはいいから。あとこれ、リクエストのやつ」

そうってポケットから取り出したのは、手のひらにすっぽり入るサイズで、▲と▼と電源ボタンのみのシンプルなデザインで色が白の光沢を抑えた質感の。

「乳首バイブのリモコンな」

声も潜めず、手のひらで覆うこともなく、手の上にちょこんと乗った、人の往来のある駅の連絡通路で渡されてるのは困るものだ。

「はあ？！……あなた嘘でしょ……」

最初だけ大きな声で反応してしまった。

「えーお前のリクエストだよ？」

「でもここで渡すのは違いますか？」

「じゃあお店に座って渡す？その方が変じゃない？ちょっと壁の方によって、こそっと渡すよ」

ならいいだろ？壁の方に向かって歩こうとする彼を止める。渡し方にもマナーがあるでしょ？デリカシーはもともと少なめ、一般常識も好奇心には負けてしまう、だから乳首バイブを仕事帰りにつけて、僕との一年目記念デートに望むなんてリクエストに応じてくれるフットワーク軽めの彼ではあるけど、やっぱり恥ずかしいとか、人に知られないかドキドキするとか、スーツの下に乳首バイブ仕込んだ背徳感で、とかそういうのまで教えないと無理なの？

「そういう感じじゃ嫌です」

器用な彼のことから、教えたらやっではくれるだろうが、教えないとダメなものなんか違う。全然役に乗ってない。求めた僕の落ち度かなんか？

「いや渡すって。お前の金で買ったやつだし」

僕のコートのポケットにねじ込もうとするリモコンの侵入を阻止する。

「嫌です、なんか違うので」

「何が違うんだよ、受け取れって」

リモコンだけ先に抜き取らずに箱ごと渡してしまった僕のミスだったことは間違いないが、今この渡し方されて、僕がスイッチをいれたところで、エッチな気分になっちゃいけないのに感じちゃう……。みたいなことにならないだろこの人！

「言わないと分からない時点で、もう違うんですって」

リモコンを渡す渡さないで攻防戦してるのに、間違ってリモコンのスイッチが入るアクシデントが起きない時点で、今の僕とあなたにバイブを使用する適性がない。

「お前が言い出したことだろ？わがままだなあ」

「そうですけど……」この空気で渡されて押せるメンタルってあなたくらい図太い人かな？

彼はむすっとしてるが、渋々といった様子でリモコンをポケットにしまう。

「じゃあ俺のタイミングで使うぞ」

……………。

え？「なんですかその」

売り言葉に買い言葉の最上級みたいなパターン、聞いたこともないし、考えたこともない。

「俺が気持ちよくなりたいと思ったら、俺が使う。これはお前には渡さない。それでいいか？」

バイブをつけた人間が、バイブのリモコンを任意で押す。それはそれは。

「なるほど、詳しくお願いします」

「なんで食いついたの」

「それは考えたことなかった」

立ち止まって腰に手を当てて少し考える姿も良い。僕が社会人になって最初の冬のボーナスでプレゼントしたそのコート、すんと落ちるシルエットと太めの袖のしわの入り方がとても素敵。

「じゃあこうしよう。お前は俺が乳首バイブを装着していることを知っているただ一人の人間だから、俺がスイッチを入れた時のわずかな反応が分かるはずだ」

バチッと指をならして人差し指が僕に向けられる。「あてっこしよう！」眉間に指が本当に刺さっても構わないくらいに提案された内容に同意する。

「もちろんです」

「ちょっと面白そうじゃない？」

「本来の目的とは大きく逸れましたがそれはありますね」プレイではなくクイズになってしまったが、僕がクイズが好き寄りの人間で本当によかった。あなたがスイッチを押した瞬間、僕も早押しクイズのボタンをいち早く押したい。

「スイッチ入れたと感じたら即言いますよ？」

「いいな、答え合わせしようぜ」

「臨むところです」

そう返事をすると彼は歩き出し、僕は彼の楽しそうな横顔を見た。少し癖のある髪は耳にかかるくらい伸びた。ひげはこめかみにちょっとそり残しがあって、シャツは僕がプレゼントした家庭用洗濯機で洗ってもしわになりにくいものを僕が先日僕の家泊まった時にアイロンをかけたものだ。彼のうちにはアイロンがないから。彼はやや家事が苦手なデリカシーもないけれど、僕の一方的な頑張りやっで恋人に成れたからこそ、愛しくて愛しくてたまらない。

「懐かしいなこの店」

「最初にデートに来たお店なんですよ、ここ」

あなたはすっかり覚えてないだろうけど。当時あなたがいた支社の近くだから選んだお店。

「いつ来たかは覚えてないけど、お前と来たことは覚えてるぞ」

「え？ほんとですか？うまいこと言って」僕を喜ばせようとして。かわいい。

「いやいや、奥の個室でちょっと太もも触ったりしたろ。足でちょっとさ」

ほら、無理するから。

「僕じゃないですね、」ここ個室ないし。店まで覚えてないなんて想定内過ぎる。

「ほんとに？君こそ誰かと来たの間違って覚えてるんじゃない？」

「僕、あなたとのことなら本当に全部覚えてますよ」

「モテるのに？怪しいなあ」

「本当に記録してます」

「こわあ」

確かに子どもの頃から女性からモテてきたけど、初めて自分から付き合いたいと思ったのはあなたがはじめてだし、あなたに一目ぼれしてからは誰とも付き合っていないと言ったのも絶対に覚えていない。今もモテてることは茶化してくるのに、僕が浮気するかもしれないなんてことも全く考えていない。このバイブをつけないと嫌われるとか、つけたらつけたで淫乱と思われるんじゃないとか微塵も思っていない。僕の愛を試すこともしなければ、自分の愛が試されているかもなんて考えることはない。だからこの人は平然と乳首バイブなんてものを「興味本位」でつけてしまう。この自然体よ。

「揚げ豆腐のこの汁ってなんでできてるんだろうね？」

にこにことがんもどきを美味しそうに食べる姿を呑気に見ていたが。

そういや今、この人乳首バイブつけてるんだよな。いつもの会話すぎてすっかり失念していた。そしてそのリモコンは彼が握っており、この飲み屋の中でいつスイッチを押したでしょうかクイズをするという触れ込みで僕のおごりを勝ち取った人が。

僕は実物は見ずに「上に服を着ればわかりにくい」というタイプのものを買って箱をそのまま渡したわけで。現在テーブルの向こうのその人の胸元をよくよく見ると、スーツを脱いで、薄手の紺のセーターを着ているわけだが(紺のセーター世界一似合ってる)、装着しているはずの乳首バイブのわずかな盛り上がりもわからない。いつもより胸筋が盛り上がってる？くらいの、いつもの彼のスーツ姿を見る人間なら言われてやっと気づけるくらいの膨らみ程度だ。

「ハイボール追加で」

紅ショウガハイボールのハイボールの部分だけ追加している時も

「やっぱり抹茶塩もいいけど、ソースあつてのって感じだよな」

もともとほうれん草と小松菜と青梗菜の違いも曖昧なほど食に関心のない人が、今も藻塩を抹茶塩と間違いながら

「俺も2年目とかは先輩風に吹かれてたよ、びゅーびゅーって。今日は西北西の風5メートルくらいかなって。自分の経験値なんて聞かれなくちゃ話す機会なんてないしさ、聞かれて答えてても一度でも時計見られたら俺ならやめるけどね。心折れちゃうから」

折れる心を持つて人は付けなさそうなアレを乳首に付けながら、ちょっと意味の分からない経験談を語ってる時でさえ。

この人の乳首にはバイブがついている。

ちらっと顔を見ると、またメニューを見ている。

おいしいお店ではあるからそれはまたしょうがないことだけど。

しかし、この人全然スイッチいれないな。

人の奢りだからこそその早いペースとお値段高めのメニューを心置きなく次々頼んで、遠慮の塊は一つも残さずテーブルの上は常に何かが乗った皿で埋め尽くされている。いつも通りの笑顔で遠慮なく飲んでいただけだ。

僕が気が付いてないだけか？そんなはずはない。日頃から彼の一举手一投足に注視している僕がこんな良いものを見逃すはずがない。そして彼は僕の反応を楽しむタイプではあるが、乳首パイプを付けてるという嘘の申告をしてまで僕の注目を集めるようなことはしない。絶対付けているはずなのに、やはり全然スイッチいれないな。

もしかして彼より僕の方が乳首パイプについて考えてるんじゃないかと思っ、彼の顔を見ようとした瞬間

「あのさ」彼がテーブルを指で叩く。コンコンと。

「お前、誰とメシ食ってるか分かってる？さっきから生返事ばかりでさ、気づかないと思ってる？」

ちょっとムスツとしてる。いやかなり。

「もちろん、」そんなことわかってる。

「お互い仕事で忙しくててやっと会った日だよな？実のところ俺はこの日のために残業を続けた。今日は定時であがるためにな！それなのにやっと会えたお前から出るのが生返事だとはな？」

「いや、だって」あなた、乳首パイプ付けてるわけで

「俺と仕事どっちを選ぶって言って俺って答えたのは嘘か？」いつ使うのか裁量権は貴方にある、

「僕はただ……」それを当てるゲームをするって決めたじゃないですか？

でもだめだ、何を言っても言い訳になる。背中に冷や汗を感じる。

「ちょっと言ってみろよ。お前の目の前にいるのは誰だ」彼の声がいつもより低い。

「僕が高校3年生の時に友達に誘われて行ったオープンキャンパスで、サークル紹介していたあなたに一目ぼれして元々希望していた大学を急遽変更したものの、あなたが何回生なのかも考えず入学した時には貴方はすでに卒業していたけれど、それでもあなたが所属していたサークルに入って興味がないのにあなたの棋譜を読み、あなたの後輩にあたるサークルの先輩にあなたのことを聞きだして、興味がないのに詳しく聞きたいなどと嘘のアポをとり、あなたに将棋のことなど興味がないと一発で見抜かれてから、詰めに詰められて告白させられてから僕の愛しい恋人になった人です」

「必死ですがったよな」

「はい」

「俺と付き合ってるのは奇跡みたいなことだって今も思ってるよな？」

「はい、僕の人生の最大の幸運はあなたです」

「ならさ、なんでさっきから胸元ばかり見てるんだよ」

座った目で僕を見ている、というより睨んでいる。冷や汗が背中を伝う。いや、だって。

「……」

「お前は乳首パイプばかり気にしてるよな？」

混みあっている店なので誰も聞いていないと思いたい。

「俺も今日は楽しみにしてきたよ、正直浮かれてた。だからこんなことまでしてさ。お前にも楽しんでもらいたいと思ったのに、さっきのリモコンのやり取りといい、お前さ、ただ変態プレイができたら誰でもいいんじゃないのか？」

酒も入ってるがまだ酔う頃ではないし、絡み酒ではない、何故なら

「そんなスイッチ押すのが気になるなら、お前が持てばよかったんだろが」確かに恥じらいとかマナーとか言い出したの僕だし、

「俺がお前に話してる時にリモコンのスイッチ入れて、中断させてさ、俺をオモチャにして遊べばいいだろ？それとも店員に注文してる時に押すか？俺をコントロールして、好きなように遊んで満足すれば良いだろ？」それが正しい使い方であるということはそうだとしても、彼の思いつきとはいえゲームを面白がったのはお互い様だけど、だからと言って彼自身との会話や時間を蔑ろにするのは違う。

「なあ？お前、どうしたいかちゃんと言えよ」

「あなたの尊厳を踏みにじるようなことしません」僕が悪い。急いで仕事を片付けて、僕の予定に合わせて、僕のわがままに付き合ってくれて、僕の選んだ店で僕の目を見ながら話をしてくれるあなたのこと、オモチャだなんて思ってません。ただ、僕も負けず嫌いで、親密な空間ではない場所で気持ちよさを感じてるあなたの顔を見たかったし、スイッチを入れた瞬間を当てたかった。勝負にこだわるあまり、相手が大切なあなたであることを忘れていたことは事実だ。どうしても嫌われたくない。

「なら、俺の顔見ろよ、どういう顔してる？」

お店のオレンジの照明が瞳を照らして、僕が恋した人の顔におだやかな陰影が落ちる。

口角が上がって諭すように優しく笑っている。

「手を出せ」

何も言わず手のひらを上にテーブルに乗せる。その手に手のひらが重なる。指も長く、節も太く、僕の手では包みきれないちゃんとした男の人の手。きっと目を瞑ってもわかる何度も握ったあなたの手。

「せっかくの夜なんだから、やり直そうぜ。」

指の間に指が滑り込んでくる。ゆっくりと柔らかく動き、彼がここにいる。僕に対して正しく怒ってそして許してくれるあなた。

「すみませんでした」

「いいよ、俺も惚れさせた責任がある」

「ちゃんと、あなたとの時間を楽しみます」

「よし、じゃあここからしきり直しな。でもお前が気になるだろうから、スーツの上は着るぞ？」そういってスーツを羽織ると、紺のセーターとの兼ね合いで胸の陰影は完全に影になる。見えにくくなった分、気が取られることもない。

「ここからはあなただけ見ます」

「そうしてくれよ。じゃあ今から一年のお祝いやり直しな。」ふふっと笑う。じゃあここからよーいスタートといって、彼が残りのハイボールを空にして、新しいものを頼む。僕もそれに続きお酒と食事と彼との幸せをお腹と胸に入れる。もともとお酒もおいしいごはんも大好きな彼は、ハイボールから焼酎、日本酒とちゃんぽんしていく。雄弁になり、僕のつまらない話で笑って彼のつまらない話で笑い、指先までアルコールと幸せが回る。雑多に飲んで酔った彼の赤くなる顔がかわいくて仕方ない。笑いすぎてちょっと涙目なのも愛しいな。彼の言う通りだ。僕は目の前に刺激に気を取られていた自分を恥じる。彼と巡り会えた幸福を忘れていた。笑いあえるのは幸せなこと。今も目を合わせると彼はニコっと笑った。